恩納村における戦災の状況（その2）

前回に続き、今月号では、戦争によって甚大な被害を被った恩納村の復興、今もなおつづく基地問題、次世代への取り組みについて紹介します。

3．沖縄戦終結と戦後の生活再建

生き残った住民は次の場所に収容された（カッコ内は集落）

羽地村田井等〈※現在の名護市〉＝（名嘉真の一部、瀬良垣、前兼久）

金武村〈※現在の金武町〉＝（中川（喜瀬武原の一部、冨着の一部）

宜野座村（名嘉真、冨着の一部、山田の一部）、

石川〈※現在のうるま市〉＝（安富祖、喜瀬武原の一部、瀬良垣、太田、恩納、南恩納、谷茶、仲泊、山田、真栄田、塩屋、宇加地）

収容された住民は米軍の配給を得ながら、命をつないでいた。一方で避難中の食糧不足による栄養失調や罹患したマラリアなどの病気の悪化、避難中の負傷の悪化などによって収容所で命を落とす住民もいた。

1945年10月、米軍の帰村準備命令によって、石川で恩納村代表者会議が行われ、村先遣隊が結成された。11月には先遣隊の仮事務所が南恩納の焼け残った民家に設置され、復興へ向けて動きはじめた。一方、集落で独自に帰村を開始したところもあった。家は焼かれ、田畑は荒れ、飼育していた家畜もいなくなり、復興は容易ではなかった。帰村当初は各集落とも幕舎に身を寄せ、米軍の配給物資をもらいながら、集団生活を余儀なくされた。しかし、建築班、農耕班に分かれ住民が共同で再建に取り組み、早い地域では4か月後から各戸での家庭生活を再開することができた。

米軍施設の建設、道路整備などで帰村が遅れた地域もあった。フェンスで仕切られ、外との往来にも制限がある海側のテントで、道路越しに自分たちの集落をみながら、1年以上生活を続けた住民もいた。

2．復興への歩み

密林だった恩納岳は戦時中、避難してきた住民を守りながら多くの命を救い、戦後の混乱期には復興のための資材、燃料として薪を取る場所だった。石油コンロが普及し、山が元の姿を取り戻そうとする50年代に入ると米軍の演習がはじまり、恩納岳を中心とする村有地が軍用地に指定された。戦後の復興産業として恩納岳の麓の肥沃な土地に茶園が作られていたが、1960年2月の米軍演習による山火事で大きな被害を受け廃園となった。実弾砲撃演習、射撃訓練によってたびたび山火事が発生し、山の大半が焼失した。

1966年10月には南恩納区の住宅の台所への流弾事件が発生し、恩納村主催の村民大会が開かれた。この事件までに40件余りの流弾事件が起きており、これ以上の事件発生を許さない厳重な抗議のあらわれであった。しかし、その後も戦車砲や機銃弾など破片が民家に落下したり、走行中のタクシーの側面に機関銃弾が貫通するなど、事件、事故は尽きなかった。2017年4月には集落から400mほどしか離れていない安富祖ダム建設工事現場への流弾事件が起きている。

米軍演習による山火事（2018年10月）

1988年には都市型ゲリラ訓練施設建設計画が明らかとなった。米陸軍特殊部隊グリーンベレーの戦闘訓練ができる施設で、住宅地から数百メートルが、既存建築物の解体の際に、汚水処